

海外もふくめ年間180近い視察団が訪れることで有名な千葉県浦安市立中央図書館を見学してきました。人口約13万の浦安市ですが、年間図書購入予算が全国平均の3倍の1億4千万円、総蔵書数が90万冊（富山市50万冊）という豊かな資料がそろった図書館です。

見てきました浦安市立中央図書館

行くなら、まず浦安図書館にというのは以前から耳にしていたので、どんな図書館かと、想像をふくらませて行ったのですが、現実に図書館の建物を目の前にしたときは「しまった！違う図書館に来てしまった」という感じでした。あまりにも普通の図書館で、全国に名をはせた図書館とは見えなかったからです。でもこの普通というのがじつは、浦安図書館のすごさでした。

過去3回にわたり増設をくり返した建物は、四角い鉄筋コンクリート、地上3階地下1階建てで、図書館入り口アプローチも清潔な病院ふうで、まるで普通。でも館内に入ったとたんに「ここでしばらく本を読みたい」という気分我突然なってしまいました。それはきっと、全体に低めの書架とわかりやすい本の並べ方、そして絶妙のバランスで置かれたソファや椅子の居心地の良さのためでしょう。利用者の使い勝手を優先して考えられた自然な配置に、浦安図書館のサービス理念を感じとることができました。

しかし浦安図書館が、もっとも評価されているのは、レファレンス(司書が調べものを援助するサービス)ルームのスペースが広いことです。これは、図書館は単に無料貸本屋などではなく、市民の調べものや問い合わせの照会、情報提供という重要な機能をもった施設だということを、強く打ち出した結果です。そして、豊富な蔵書と資格をもつ43人の司書が、1分30秒に1件のレファレンスを処理するという状況が、普通に落ち着いたフロアで淡々と繰り広げられているのです。

館長の常世田氏は、「図書館は単に本好きの人に小説を貸し出す場所ではなく、誰にでも情報を届けるという機能が本来ある。アメリカでは日本の4倍の税金を図書館に使っている。日本では、図書館活動は“文化政策”だと思われがちだが、諸外国では図書館活動は“情報政策”なんです」と述べておられますが、その理念が隅々で普通に実現されているのが、浦安図書館なのです。

今全国には、一流建築家による魅力あふれる建物や他の公共施設を複合させた図書館が、続々と建てられています。けれども本来の図書館の機能や可能性を第一に考えたほうが、けっきょくは利用者が使いやすい、地域の特色にあふれた施設になるのだということが、よくわかりました。

けれども、私が「普通」と感じたのには、もうひとつ理由がありました。それは、レファレンス室の存在や充実したレファレンスサービスなら、富山市立図書館でも日々実感して受けているサービスだからです。もちろん、浦安図書館のように、すぐに手に取れる35万冊の本は、富山市立中央館にはありませんし、無料のインターネットの端末もありません。けれども浦安図書館が、どんどん増える本のためにフロアを増設し、情報発信機能を発展させていけたのも、その時代の流れにあわせて、図書館が成長できる建物だったからに他なりません。

今までの富山市立中央館はあいにく、そういう建物を持ち合わせていませんでした。だからこそ、これまでの富山市立図書館のソフトの面を活かすためにも、新しい建物は、成長が可能なものにしなければならないと改めて思いました。

参考文献：『県別図書館案内シリーズ 千葉県の図書館』森田 保 著 三一書房
『だれが本を殺すのか』佐野真一 著 プレジデント社